

琉球大学学術リポジトリ

イノシシの習性、被害、防除方法およびラムタリンによる防除試験

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 清二, Azuma, Seizi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21150

頭を痛めている。従って山地開発によって耕地の拡大をはかってきた北部町村では、猪害対策は大きな課題になっている。そこで琉球大学農学部では、皆様とその対策を協議し、合理的な防除の方法をうみ出すべく、普及事業の一環として政府農林局と共催で会合をもつことにした。

イノシシは、前に述べたように農作物を加害す

るが、しかし他方では狩猟資源として風味佳良な肉を提供し、またハブの駆除にも一役かっている。従って防除のあり方としては、完全撲滅というのではなく、その生息密度をへらし、且つ被害を最小限度にくだし、農家の経済生活を豊かにすることである。

(琉球大学農学部長 高良 鉄夫)

イノシシの習性、被害、防除方法およびラムタリンによる防除試験

I イノシシの習性

1 生息場所及び活動範囲

山地の主として里山に棲む。活動範囲は約80km²で、5～7日間で一巡する。夜行性で、昼間は、カヤ野の危険のない場所で休息し、夕方から朝にかけて活動するが、深山では昼間でも活動する。また年中活動し、どんなに寒い時でも穴に入らない。非常に活動力に富んでいて、山越えをしてきて山間部の農地を荒らす。

2 繁殖

発情期は12月頃から翌年の2月までで、オスは遠い所まで出かけメスをさがす、オス同志が出合うと烈しい争いを行い、一方が死ぬことも珍しくない。精力のある6～7才のオスは数頭のメスを獲得することもある。発情期がすむとオスはメスから去り、若いオスはメスの群にもどり、メスが仔を産むために群を去るまで一緒に生活する。

112～140日の妊娠期間の後に、普通5月頃に5～6仔を産む。非常に多産で1腹12仔あるいはそれ以上に達することも稀でない。出産は年1回が普通らしいが、沖縄では年2回の場合も多いようである。仔は完全にかくされた寝屋に生れ、数日間はそのを離れない。生れたては斑紋のある爪坊だが、2～3カ月でこの紋は消失する。1～2カ月でタテガミが出来、3～4カ月で乳歯がそろそろ。10カ月で永久歯が現われ、2年の終りに完成する。牙は1年で現われ、性的に成熟するのは1年半である。2才仔と若いオスは群棲するが、成獣は冬以外には単独で生活する。

3 食性

食物は、まったくの雑食性で、植物質のあらゆるものを食べるが、なかでも、タケノコ、シイの実、アダンの実、クズ、ユリの根、ヤマイモ、サトウキビ、サツマイモ、イネ、パインアップルなどを好む。動物質では、カニを特に好むが、カエル、ミミズ、タニシ、ヘビ等も食べる。

4 天敵

天敵は、クマタカ、タヌキ、ヤマネコなどで、共に生れたての仔を補食すると言われている。

II イノシシの被害

あらゆる農作物に被害をおよぼすが、その主なものを取り上げて説明すると次の通りである。

被害は、特に秋から冬にかけてシイの実などが少なくなった時期に多く発生する。

1 サツマイモ

塊根の小さい時から吻端で地中を掘りおこして塊根を食べるか、あるいは、根もとごとひき抜いて加害する。特に、塊根が成熟した時期にその被害が多く、1頭で1夜に1反歩をすぎ起こしたように土地を掘りおこして加害することは珍らしくない。

2 サトウキビ

吻端で土を掘りおこしたり、或は畑にねころんでサトウキビを折損したりすることもあるが、普通は、茎中央部の割合軟くてブリックスの高い所を食害する。食った残査は周辺に散らかしておく。被害は、圃場の周辺よりも中央部に多く発生する。

3 パインアップル

加害の様式を次の4つに分けることができる。
イ) 圃場を掘りおこしてパインアップルをひき抜くかあるいは押したおすか、または根を害

する。

ロ) 新芽や葉を抜く。そのためパイナップルの生育が遅れ、またはしんぐされ病にかかり易くなる。

ハ) 果実を食害する。半熟程度の果実を好んで果梗に近い果質の良い部分をえぐるように食害する。

ニ) 圃場にねころんでパイナップルを倒伏せしめる。

4 イネ

乳熟期の穂を好むが、水田中にねころんでイネを倒し、これを幼獣に食べさせる習性からくる被害が大きい。勿論、苗代や各ステージのイネも被害をうけるが、更にウルチよりもモチの方を好む。

5 落花生

根もとからほりおこし、実を食害する。

6 樹木

10年生以下の樹木に被害が多く、日本では、スギ、ヒノキ、マツ類、モミ、クスノキ、ナラ、アベマキ、クリ等が害され、スギに最も被害が多い。被害の時期は、1月が最も多く次いで5月、4月、3月と少なくなっており、11月に最も被害が少ない。

III 防除方法

イノシシの被害を防ぐために従来おこなわれている防除法を大別すると次のとおりである。

1 物理的防除法

音響……………鳴子、爆音器

かかし……………衣類、異様なもの

光……………ローソク、たき火、電灯、

これらの防除効果は設置後しばらくの間はよいが、しかし短日時にイノシシは馴れてしまうのでかわったものに取り変えるとか或は他の防除法と組み合わせるとかいろいろな工夫が必要である。

爆音器も、もともと鳥害を防ぐ目的で作られたものが多く、音が上方のみ広がるので効果が余りない。イノシシに対しては、音が下にさがるようにすれば少しは効果が長もちするようである。

2 機械的防除法

遮断法……………木竹柵、針金柵、わら縄柵、石垣、溝、電気柵、

捕殺法……………誘致捕獲柵、銃、わな、しかけ銃

これらの防除効果は割合に高い。戦前、沖縄において猪垣を作り、イノシシの被害を防止することは、部落共同の責任として重要事業の1つとされていたものである。その名残りは今日でも各地にみられるが、山地が開墾されるに従い目的を果しているものは殆んどない。

電気柵は、はじめは経費がかかるが、その後の電気代などの維持費は安いものであるから、農地の場合には、年々の被害額と見合えば有利であるとされ、日本では各地に行なわれている。30ボルト位の電流を流すのであるから、これによる人畜の被害はなく、イノシシはこれに近よらなくなる。

捕獲柵は、5m×5m位の広さに、太い丸太で柵を作り、その一部を落ち戸にしておき、柵の中には、サツマイモなどイノシシの特に好むものを植えこんでおき、これを食べに入ると落とし戸をつるしてあるロープにふれると、これがはずれて戸が落ちる仕組みになっている。構築にはかなりの費用を要するが人畜には危険がなく、イノシシの通り路などの近くであれば、かなり捕獲することができるものである。

銃獲は最も容易な方法であるが、このためには優秀な猪用の猟犬が必要である。これには紀州犬が最もすぐれているといわれている。

わな法にも色々あるが、ワイヤーの一端を立木に結び、他端をクトリデ結びクにした簡単なものが最も多く利用されている。

3 化学的防除法

忌ひ剤……………ラムタリン、クレオソート系

毒殺……………ネコイラズ、キニーネ

忌ひ物……………衣類、海藻、動物腐敗物、廃油またはその空かん

それらを圃場周辺に設置する方法であるが、忌ひ剤の場合は割合効果は長いが、忌ひ物の場合は一時的な効果があるにすぎない。

4 人為的防除法

不寝番

5 生物的防除法

天敵としてクマタカ、タヌキ（日本本土）ヤマネコなど

以上のとおりであるが、最近化学的防除法の一

方法として忌ひ剤の散布が行われつつある。それについて試験を実施したので、成績の概要を説明する。

Ⅲ ラムタリンによる防除試験

1 ラムタリンについて

野生動物は人間と異なり、嗅覚、味覚が非常に発達しており、その鋭い嗅覚が外敵を防いだり、食物をとったりする上に重要な働きをしているわけですが、その習性をうまく逆用し、最も嫌う臭と味で動物の被害を防ごうとしたものがラムタリンである。

味の成分として放線菌 (Streptomyces Gri-seus) によってストレプトマイシンを生産する際、培養液中から分離される抗生物シクロヘキシミド (Cyclo-heximide) を臭気性成分としてメルカプタンを樹脂化して安定させたものである。

イノシシ、ノウサギ、クマ、ネズミなどが、一度これをなめたり、かいだりすると二度と口したり、近よったりしない物質だといわれている。

2 試験方法

- (イ) 大宜味村と国頭村においてイノシシの被害の多いサトウキビ園とパインアップル園を選び、それを処理区とし、近隣した所に対照区を設けた。
- (ロ) 1966年12月2～3日に薬剤を散布し、約1カ月後に調査を行なった。
- (ハ) 処理区はラムタリン液を圃場周辺のサトウキビまたはパインアップルに散布し、歩行区は圃場周辺を4回あてゆっくり歩いた。

3 試験成績

(イ) サトウキビ圃場における成績

場所	処理別	供試面積	被害茎数 (カッコ内は試験前の被害茎数)
大宜味村 (喜如嘉)	処理区	13 a	4本 (約500本)
	歩行区	10	0 (0)
	無処理区	20	21 (0)
国頭村 (宇嘉)	処理区	13	48 (179)
	歩行区	10	4 (2)
	無処理区	10	0 (0)
国頭村 (宇嘉)	処理区	13	0 (27)
	歩行区	13	0 (11)
	無処理区	7	36 (多数)

(ロ) パインアップル圃場における成績

区 別	処理別	面積	被害果率	被害新芽率	倒伏茎率
1年株	処理区	4 a	—	2.6%	0.16%
	歩行区	5	—	6.1	0.33
	無処理区	7	—	34.0	8.5
2年株	処理区	13	2.7%	11.2	0%
	歩行区	13	14.2	16.3	8.0
	無処理区	13	20.3	28.1	13.5

4 成績の検討

試験成績のとおり 場所により効果が一定でない。それはイノシシの侵入し易い圃場を処理区に逆定したことや、ラムタリン散布を圃場周辺のみに行ない、最も被害の受け易い圃場中央部に行なわなかったことなどによるものと思われる。しかし割合よい防除効果があり、この方法もイノシシ防除法に取り入れてさしつかえないものと思う。

(琉球農業試験場 東 清二)

沖縄における猪害状況

1. 年間捕獲頭数

町村別のイノシシの年間捕獲頭数 (各町村で買上げた頭数) を見ると第1表のとおりである。

イノシシの捕獲頭数は、年々増加しており、1967年度は、沖縄北部町村だけでも2213頭に達している。これは、1966年度の捕獲頭数の約1.8倍に相当する。なお、この表には、八重山における捕

獲頭数は記載されていないが、八重山も含めれば1967年度は3000頭近くなるであろう。

各市町村では捕獲されたイノシシを買い上げ、政府もこれに対して50%の補助を与えて捕獲を奨励しているが、この買い上げ予算を町村別に見ると第2表のとおりである。なお、買い上げ値段は各町村によって異っていたが、1968年度からは、これを統一することになっている。